
(原著論文)

社会的養護におけるパーマネンシーに関する一考察

—児童養護施設に入所する子どもたちの声に焦点を当てて—

社会福祉法人厚生館福祉会 至誠館さくら乳児院
宮脇和花

抄録

目的：本研究の目的は、施設で生活する子どもに、施設における可能な限りのパーマネンシー保障を検討することである。

方法：X 児童養護施設で生活している子ども 13 名を対象に、半構造化面接法による個別インタビューを実施した。結果の整理から、仮説的に設定したパーマネンシーの要素「継続性」、「所属の感覚」を手がかりに、検討を行った。

結果：継続性を担保された経験を持つ子どもは、「ケア職員と場への肯定的な所属の感覚」を持っていた。継続性を担保されていない子どもの多くは、何かしらの「所属の感覚」を持っていた。「所属の感覚」を持たない子ども 3 名全員が高齢児であり、そのうち 2 名が措置変更、1 名はケア職員の度重なる交代の経験があった。

結論：「ケアの継続性」は、子どもが信頼できる「人」と「場所」を得られるために重要である。施設養育であってもパーマネンシーを意識したケアの継続性は意味のあるものであることが示唆された。

キーワード：パーマネンシー、児童養護施設、子ども、継続性、所属の感覚

I. はじめに

2017 年に新しい社会的養育ビジョンが示され、家庭養育優先の理念が規定された。また、実親による養育が困難であれば、特別養子縁組による永続的解決（パーマネンシー保障）や里親による養育を推進すること（厚生労働省・新たな社会的養育の在り方に関する検討会、2017）が明記された。それにより、児童相談所において、パーマネンシー保障のための家庭復帰計画、それが困難な時の養子縁組推進を図るソーシャルワークを行える十分な人材の確保を概ね 5 年以内に実現する（厚生労働省・新たな社会的養育の在り方に関する検討会、2017）等の目標が掲げられた。また、代替養育は、本来は一時的な解決であり、家庭復帰、親族との同居、あるいは、それらが不適当な場合の養子縁組、中でも特別養子縁組といった永続的解

決を目的とした対応を、児童相談所は、里親や施設と一致してすべての子どもに対して行われなければならない、漫然とした長期間にわたる代替養育措置はなくすべきである（厚生労働省・新たな社会的養育の在り方に関する検討会、2017）という記述がある。つまり、家庭復帰、特別養子縁組、里親委託が推進され、パーマネンシーの保障は家庭養護を推進する方向性が示された。

一方で、現状の社会的養護の対象児童は約 4 万 5 千人であり、そのうち施設で生活している子どもは約 3 万 8 千人である（厚生労働省、2017）。新しい社会的養育ビジョンでも、子どもの最善の利益として家庭復帰や養子縁組が困難な場合に長期養育里親委託や長期施設入所措置もやむを得ない場合がありうる（厚生労働省・新たな社会的養育の在り方に関する検討会、2017）とされている。

これらの現状を踏まえて考えても、今現在、施設で生活する子どもたちへのケアの質向上は喫緊の問題である。

パーマネンシー保障は本来、すべての子どもに考慮されるべきである。子どもにとって家庭を保障されるということが約束されておらず、施設で生活する子どもが1人でもいる以上、施設で生活していても可能な限りパーマネンシーが保障されるような仕組みに代わっていく必要がある。

Kirtonによると、パーマネンシーとは、「継続性」と「所属の感覚」という2つの側面で成立する概念である(Kirton, 2009)。現状、施設での生活は、職員の異動や退職、子ども自身の施設内の移動、措置変更等と隣り合わせであり、継続性を保障できているとは言い難い。これらの変更は大人側の都合に左右されるものが多いと考えられる。

以上を踏まえ、本研究では児童養護施設で生活している子どもへのインタビューを通し、子どもたちの所属の感覚はどこにあるのか、また、施設での生活における継続性を保障したときに、子どもの所属の感覚がどのように変化するのかの分析を行った。本研究の目的は、施設で生活する子どもへの、施設における可能な限りのパーマネンシー保障について検討することである。

II. 方法

1. 研究方法

研究方法は、X児童養護施設で生活している子ども13名を対象にした半構造化面接法による個別インタビューの発言等について、帰納的な分析を行った質的研究とした。

筆者はインタビュー当時X児童養護施設において直接支援のアルバイトをしており、13名のうち8名は筆者がアルバイトしていたホームで生活している、もしくはしていた子どもであった。残りの5名は行事等で顔を合わせる程度であった。

子どもとの関係性やその違いは、筆者と話すことへの緊張感の違いから回答に影響する可能

性があった。そのため、希望する子どもには、インタビューの前に雑談や遊ぶための時間を設けた。さらに、子ども自身の居室等、慣れた場所でのインタビューを行うことで、なるべく緊張感を減らす対応を行った。また、子どもの背景や普段の生活、考え方に対する筆者の理解に差があるという点で、解釈に影響する可能性があった。そのため、インタビューをもとに論文を執筆するにあたり必要と考えられる子どもの情報について、職員に確認を取った。

2. 調査項目

X児童養護施設で生活している子ども13名を対象に、施設ケアにおけるパーマネンシーの感覚について半構造化面接による個別インタビューを実施した。

インタビューでは、児童養護施設における継続的な関わりが子どもの対場所、対大人への考え方にどのような影響を及ぼしているかを理解するために以下4つの質問項目を用意した。

- 1) 乳児院から児童養護施設に来ることについてどう思うか。
- 2) 職員の異動等でホームの職員が変わる時、何が大変か。何がラッキーか。
- 3) ずっと同じ職員に担当してもらって同じホームで生活したいか。
- 4) この人のために頑張ろうと思える大人はいるか。それは誰か。

本論文では、2) 3) 4) の回答を使用した。

3. 倫理的配慮

インタビュー協力者が生活しているX児童養護施設の施設長に対し、①参加の意思の自由、②秘密保持、③記録の取り扱い、④結果の公表、⑤同意撤回の自由の5つの項目について文書と口頭での説明を行った後、文書で同意を得た。また、インタビュー協力者に対し、施設長に伝えた内容を平易な言葉にした書面を作成し、加えて口頭での説明を行った。

具体的には、①論文で使用すること、②答え

たくないことは回答しなくて良いこと、③嫌になったらいつでも終了して良いこと、④インタビューが終わった後に文章に使ってほしくなくなったらいつでも職員さんに伝えてほしいこと、⑤職員さんやほかの子どもに話した内容は伝えないこと、⑥文章（論文）になるときも、誰が何を言ったかはわからないこと、⑦録音するが文章を作るのが終わったら消去すること、⑧はじめてよいか、の8点について書面におこし、それに沿って口頭で説明しながら子どもの反応に対応した。また、インタビュー中はいつでも子どもが見ることができる位置に置いておいた。

なお、インタビューに際しては、子ども一人ひとりに合わせ、個人の居室や職員室、会議室など話がしやすい場所での聞き取りを行った。完成時には文章を施設長に提出し、プライバシー等の内容を確認していただき、論文におけるデータ使用の許可を得た。

4. 仮説を含んだ研究枠組み

本研究では、Kirton の考え方を採用し、パーマネンシーを「継続性」と「所属の感覚」という2つの側面で成立する概念である（Kirton、2009）とした。

また、伊藤によると欧米のパーマネンシー・プランニングの最優先事項は、子どもと実親との関係修復や保障であり、それがかなわない時は一時的な養護を提供しながら家族再統合に向けた最大限の努力を行うことである。それでも家庭復帰や家族再統合が不可能なケースにおいては、パーマネンシー（永続性と所属の感覚）を保障し得る代替養育として養子縁組を行うとされている（伊藤、2017）。本研究では、前述のパーマネンシーの概念を仮説的に援用し、施設でのケア場面においてパーマネンシーを保障することへの可能性を分析した。

5. 用語操作上の定義

本研究で用いる用語を以下のように定義し

た。

1) ホーム

X 児童養護施設におけるユニットの呼び名である。本園での定員7名のユニット、もしくは定員6名のグループホームのことを指している。

2) ケアの継続性

園井は「パーマネンシー」について、「養育者」及び「養育環境」の「安定性」と「継続性」（園井、2013）であると述べた。

現状の X 児童養護施設を含む多くの施設では、交代勤務が行われている。「安定性」については子どもの発言だけでは判断が難しいものの、少なくとも「継続性」については外的に検討が可能である。本研究では子どもが入所してから、もしくは小舎の建物になってからインタビューを受けるまで同じホームで生活していること、あるいは X 児童養護施設に入所してからインタビューを受けるまでほとんどの期間を同じホームで過ごし、その生活しているホームに異動や退職をせず勤務しているケア職員が1人でもいることを、継続性が担保されている状態とし、「ケアの継続性」と定義した。

3) 所属の感覚

ソブンは、自分は家族に愛され、家族の一員であることに誇りを感じている状態（ソブン、1998）であると述べた。本研究ではソブンの考え方を援用し、子どもが人と場に対して持っている肯定的な感覚、つまり、自分が大人に大切にされていると感じることや、自分がホームに居たいと思えている状態と定義した。

4) 高齢児

本研究では、高校生を高齢児と定義した。

Ⅲ. 研究結果

1. 分析対象者の基本属性

調査対象者 13 名（A～M と表記）が分析対象者であった。分析対象者は男子が 4 名、女子が 9 名で、学年は小学 2 年生～高校 3 年生であり、小学生が 3 名、中学生が 4 名、高校生が 6 名であった。また、そのうち、乳児院や他の児童養護施設、里親宅や病院など、家庭ではない場所から X 児童養護施設に入所したのは 5 名、X 児童養護施設内でホームの移動をしたのは 4 名であった。なお、現在小舎制の本園とグループホームで構成されている X 児童養護施設が大舎制だったころから入所している分析対象者がいるが、ホームの移動をした人数には含まない。

2. 分析結果

分析対象者 13 名のうち、X 児童養護施設において継続性を担保された子どもは 5 名、継続性を担保されなかった子どもは 8 名であった。

分析対象者 13 名のうち、場への所属の感覚について、所属の感覚を持っているのは 9 名、持っていないのは 4 名であった。また、人への所属の感覚について、ケア職員に対して持っているのが 3 名、元ケア職員に対して持っているのが 3 名、持っていないのが 7 名であった。

インタビュー結果を表 1 で示した。また、本文中においては、筆者の発言を“ ” で、分析対象者の発言を「 」で示した。

1) 施設におけるケアの継続性の意味

継続性を担保された子どもは、ホームにいるケア職員に褒めてもらいたい、ずっと同じ場所に居たいという、職員と繋がりを感じているからこそ素直な感情を表現した。継続性を担保されていない子どもは、元ケア職員に対し、長い間担当してくれたことで記憶に残っていると発言した。継続性が担保されている子どもにとっては、長い間ケア職員が変わらないことは当たり前であり、このような

発言は、継続性が担保されていない子どもならではの考え方と捉えられた。

継続性が担保された子どもが、職員との関係を前提とした発言をしているのは、生活の場に安定した関係があるからであると示唆される。ケア職員が変わる可能性や、自分がホームもしくは施設からいなくなる可能性について考えなくてよい生活の中で、子どもは地に足のついた生活をするができる。地に足がついているということは、そこに根が張れるということである。

2) 施設における所属の感覚の意味

継続性が担保された子どもは、ケア職員に褒めてもらうことを原動力に、目標へ向かって考えることができていた。自分のことをケア職員が見ていて、努力を認めてくれると知っているからこそである。それは、子どもが、自分は大切にされていると感じているということではないだろうか。

継続性を担保されていない子どもは、目の前のケア職員への肯定感を話さなかった。ケア職員の度重なる変更により、見てもらえているという感覚を子どもが持つことが難しいからであると考えられる。

つまり、安定した関係があるからこそ、自分が大切にされていると感じることができる。自分に向けられた肯定的な感情を受け取る力が培われているために、新しい場所や目標に向かう過程でも、自分が大切にされていることに気が付くことができるのである。

自分が大切にされるということは、相手を大切にすることにもつながる。その結果、自分を取り巻く環境について、自信をもって語ることができると考えられる。

これこそがより肯定的な、施設における所属の感覚とも言えよう。

表1 インタビュー結果のまとめ

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
経路1													
経路2													
経路3													
経路4													
経路5													
経路6													
経路7													
経路8													
経路9													
経路10													
経路11													
経路12													
経路13													
経路14													
経路15													
経路16													
経路17													
経路18													
経路19													
経路20													
経路21													
経路22													
経路23													
経路24													
経路25													
経路26													
経路27													
経路28													
経路29													
経路30													
経路31													
経路32													
経路33													
経路34													
経路35													
経路36													
経路37													
経路38													
経路39													
経路40													
経路41													
経路42													
経路43													
経路44													
経路45													
経路46													
経路47													
経路48													
経路49													
経路50													
経路51													
経路52													
経路53													
経路54													
経路55													
経路56													
経路57													
経路58													
経路59													
経路60													
経路61													
経路62													
経路63													
経路64													
経路65													
経路66													
経路67													
経路68													
経路69													
経路70													
経路71													
経路72													
経路73													
経路74													
経路75													
経路76													
経路77													
経路78													
経路79													
経路80													
経路81													
経路82													
経路83													
経路84													
経路85													
経路86													
経路87													
経路88													
経路89													
経路90													
経路91													
経路92													
経路93													
経路94													
経路95													
経路96													
経路97													
経路98													
経路99													
経路100													

3) 継続性を担保された子どもが持つ所属の感覚

X 児童養護施設において、継続性を担保されている、もしくは継続性を担保された経験のある子ども3名(A、B、C)は、ケア職員とホームに対し、肯定的な所属の感覚を有していた。

この3名は、インタビューの中で、継続性を担保するきっかけとなったケア職員を起点として、「褒めてほしいみたいなのが小さいころからあって、褒めてほしいから頑張って勉強するみたいなのはある」、「ホームの職員には褒めてもらいたい」と発言した。また、直接褒めてもらいたいという言葉を使わない子どもであっても、「ホームの職員さんのために成績とったりとか」と発言し、インタビュアーである筆者にも良い点数のテストを見せるなど、自分が頑張れば、大人が認めてくれると理解している言動をとった。

これらの、大人に褒めてもらいたいという思いと、その思いをもとに努力をすることができるという事実は、それを受け止められた経験に基づいていると考えられる。また、大人に褒めてもらいたいという思いや、関わりの深くない筆者に対して良い点数のテストを見せて褒めてもらおうとする行動は、職員との繋がりを感じているからこそその、自分の頑張りを誰かに認めてもらえるという素直な考え方からの言動であると考えられる。

また、Aはケア職員に対し、「自分のこととか分かってくれてるから、一から教えなくたってほほわかるから」との発言もした。Cは、入所から7年間変わらなかった、以前生活していたホームのケア職員に対し、「高校の話とかも大学の話とかも結構してたので、施設をでるまでずっと一緒に良かった」と話した。

A、Cは、安定した関係をもとにして、大人が自分のことを当たり前知っているという安心感、自分のことを見てくれている大人と話ができることに対する安堵感を持って

ると考えられる。

一方で、ケア職員の度重なる変更の経験があり、人に対しても場に対しても所属の感覚を持たないLは、ホームの職員が変わるたびに「この人はこういうふうに思ってるから、この人にはこういう自分でいようみたいな」と、相手によって態度を変えていたことを話した。

これは、継続性を担保された子どもが、継続性を担保されたからこそその安定した関係をもとに、ケア職員に対する肯定的な感情、つまり、人への所属の感覚を持っているという結果である。

また、継続性を担保された経験のある3名全員から、ホームに対する所属の感覚の発言があった。

Aはホームに対し、施設を出るまで「あんまり変わらないでほしい、メンツはこのままでいきたいって気持ちはある」「子どもも大人もホームごと」と発言した。Cは以前生活していたホームに対し、「入所のころからずっと7年間くらい同じ職員で、高校の話とかも大学の話とかも結構してたので、施設をでるまでずっと一緒に良かったです」と述べた。Cはこのような発言をしたうえで、前述のケア職員に対する思いを語る場面において、「元居たホームの職員と、今いるホームの職員には褒めてもらいたい」と現在生活しているホームのケア職員についても発言した。

これらの発言も、安定した関係の心地よさを子どもが知っていることがわかるものである。さらに、ホームにいるケア職員に自分が大切にされているという実感がなければ出てこない発言であると考えられる。特にCにおいては、自分が安定した関係の中で大切にされた経験を軸にして、施設で生活する子どもならではのホームの移動等の傷つき体験がありながら、目の前のケア職員に対し、褒めてもらいたいという期待感を持っているのである。それは、Cが安定した関係の中で培って

きた人と場に対する肯定的な所属の感覚であり、その肯定感を次の場所へ広げていると捉えることができる。

また、本研究のインタビューを受けた子どもの中で、生活するホームが変わらないほうがいいという回答は多数あったが、これほどまで細かく場への所属感を語る子どもは、継続性を担保された子どもだけである。それは、子どもたちの年齢や話すことの得意不得意に左右されるものでもあるが、自分が生活してきた場への思いが深く、また、その自分の気持ちに胸を張って語ることができるという事実でもあるのではないだろうか。

4) 継続性を担保された経験のない子どもが持つ所属の感覚

X 児童養護施設において、継続性を担保された経験のない子どもの多くは、「ケア職員への肯定感」は薄い、何かしらの「所属の感覚」を持っていた。

継続性を担保された経験がない子どものうち、異動や退職によりホームを離れた職員に対し、肯定的な発言をした子どもは3名(D、E、F)である。

Dは担当職員が元担当職員Oに変更になったときのことを強く覚えており、その年に児童相談所の担当児童福祉司や担任も変わったことにより、「暴れるようになった」と話した。「元担当職員Oさんじゃなかったら、(Dの担当職員は)半年とかでやめちゃったんじゃないかなって」と思っていることを話し、「元担当職員Oさんじゃなかったら、私ここにいないかもって思う」と述べた。また、Eは、「(Eが頭に思い浮かべる元担当職員Pは、Eが)ちっちゃい頃もいたから」「4年か5年担当してくれた」と述べた。

これらの元ケア職員に対する肯定的な発言は、子どもそれぞれにその職員の名前を挙げる理由がある。それは、担当ではなくなっても退職しなかった唯一の職員であることや現

在もフレンドホームとして本児とかかわっている元職員であるといったものである。これらは、継続性を担保された経験のない子どもたちにとっての、子どもたち自身が見つけた継続性ともいえるかもしれない。

一方で、これらの発言は、長く担当してくれた、自分にとって特別な対応をしてくれたことに対する発言である。継続性を担保されたために、目の前のケア職員に対して肯定的な発言をしている子どもとの違いは、安定した関係の中で感じた安心感、心地よさについての発言がないことである。そこには、ケア職員の度重なる変更により、自分の目の前の大人が何度も変わることに対応している子どもの姿があるのではないだろうか。だからこそ、長く担当してくれることが特別になっていると考えられる。ケア職員の変更がなければ、「ちっちゃい頃もいた」ことや長く担当することは当たり前であり、それは頭の中に思い浮かべる大人に名前を挙げる理由にはならないのではないだろうか。実際、継続性を担保された子どもは、長く一緒に居ることだけでなく、そのために将来の話をしてきたことや、自分のことを分かってくれているということを経験として挙げた。

また、Dは暴れた理由を、「その年に(自分の周りの大人が)変わることが多すぎて、嫌になっちゃって」と話している。Dは困っていたから、「暴れる」という行動を起こしたと考えられる。しかし、それに対し、「元担当職員Oさんじゃなかったら、(担当職員は)半年とかでやめちゃったんじゃないかなって」と感じているのである。今までの度重なるケア職員の変更から、困っているときに大人に助けてもらえるという実感が薄いだけでなく、自分の行動によって継続性が途切れているとも感じていると考えられる。

これらは、職員との関係を前提とした素直な感情表出とは言い難く、継続性を担保されなかった子どもならではの発言である。

Dは担当職員が変わった年に、児童福祉司や学校の担任も変更になったことを、「その年が変わることが多すぎて、嫌になっちゃって」と述べた。これは、継続性を担保されることを望んでいる発言である。継続性が担保されたときに、Dはより深い、人への肯定的な感情や場への所属感を有することができたと考えられるのではないだろうか。

また、継続性を担保された経験がない子どものうち、ホームに対し肯定的な発言をした子どもは5名（E、F、G、H、I）である。

Gは、担当が変わることや生活の変化についてのインタビューの質問に対し、「別に」「ないよ」と一言で回答していたが、唯一“ずっと同じホームに居たいか”という質問に対して「おんなじホームには居たい」と答えた。Gはケア職員の度重なる変更があったホームで生活している。G自身の担当職員が異動や退職することもあった。しかし、G自身がホームを移動したことはなかった。インタビューの回答から、ホームを自分が生活する場として肯定的に居場所と捉えていることを感じ取ることができた。実際に、GはX児童養護施設に入所してから、緊張していた日々はあったものの、その後の生活が安定しているのである。そのような姿からも、Gがホームに対し、所属の感情を感じていると考えられる。

また、Fは“ずっと同じホームに居たいか”という質問に対して、即答で「うん」「ふつうそうでしょ？」と回答した。

これらは、継続性を担保された経験のない子どもであっても、子どもが生活する場への所属の感情を持っているという結果である。

入所する前に子どもたちが様々な体験をしてきたことを考えると、X児童養護施設の中での生活が、子どもたちにとって初めての安定であったと考えられる。

つまり、X児童養護施設で養育される経験自体が、子どもに居場所を提供することであり、その結果、多くの子どもたちが場に対す

る所属の感情を持つきっかけになっていると言えるのではないだろうか。

また、継続性が担保されていないにもかかわらず、場に対する所属の感情を持っているのは、子ども自身の力でもあると考えられる。継続性を担保されない状況であっても、その中でも変化の少ない場に対し所属の感情を持っているのである。それは、生きていくために、自分の存在をどこかに置くという行為を、子ども自身の力でやっているということでもある。

また、X児童養護施設において継続性を担保されているにも関わらず、ケア職員や大人に対する肯定的な発言をせず、場に対しての所属の感情のみ述べたJは、インタビューの中で「これ言っているのかな」と迷いながらも、「私の前だけで意地悪っぽくされて嫌だったなってことはあった」と施設内で不適切と感じる関わりを受けていたことを話した。Jは、実際に過去X児童養護施設内で不適切な関わりを受けた経緯があり、「これ言っているのかな」と迷いながら回答したことを考えても、不適切な関わりについての発言と考えられた。

施設の中で不適切な関わりを受けるということは、当たり前な生活が脅かされる経験である。その結果、子ども自身が継続性を感じることができない状況であると考えられる。それでも、Jは変わらない場所であるホームに対し、「(変わらないでほしいと)思う」と発言した。また、頭に思い浮かべる大人はいないとしたうえで、「慣れるとさ、こころもいいやすくなる」と、ホームの職員に対しても変わらないでほしいという気持ちを話した。

JがX児童養護施設で、入所する前の生活の再体験をしたにもかかわらず、場に所属の感情を持っていることは、子どもが何かしらに所属の感情を持つ強い力を持っていることがわかる結果である。

5) 所属の感覚に関する発言をしない子ども

所属の感覚に関する発言をしない子ども3名(K、L、M)のうち、2名に措置変更の経験があった。

KはX児童養護施設において継続性を担保されているが、“同じホームにいたい、同じ職員に担当してもらいたい”という質問に対し、「特に思ったことはない」と発言した。インタビューの中で、「結構転々と変わっちゃったんで」「ドライな答えだと思います」と自分から話した。Kは、Z児童養護施設から、X児童養護施設への措置変更を経験している。「結構転々と変わっちゃったんで」という発言は、措置変更のことを表していると考えられる。そのために、X児童養護施設において継続性を担保されても、その継続性をK自身が感じる事ができていないのである。

Mは、ケア職員の度重なる変更や、M自身のホーム移動を経験した。職員が変わると「新しい職員さんとなじめるかなって」と不安になると回答した一方で、“同じホームにいたい、同じ職員に担当してもらいたい”という質問に対し「いや」と否定し、担当職員について「知ってる人だったら別にいい」と述べた。MはX児童養護施設から里親委託になったが、数年後に委託解除になり、X児童養護施設に再度入所した経緯がある。

Z児童養護施設や里親家庭において、KとMは不安を感じながらも、そこに根を張ろうとし、どこかに所属の感覚を持つようとしていたのではないだろうか。措置変更は、その子どもの決意を覆すことにつながると考えられる。つまり、措置変更の経験により、X児童養護施設で養育される経験により培われる肯定感や、子ども自身が何かしらに所属の感覚を持つ力が発揮されない状況であると考えられる。

Lはケア職員の度重なる変更を経験した。インタビューの質問に対して回答せず、Lの

きょうだいがX児童養護施設に入所した際にホームが別であったことを挙げ、「なんで私あそこ(のホーム)じゃないんだろう」と思ったと述べた。インタビューの内容を理解できなかったとは考えにくく、Lにとって、ケア職員の変更に関する内容の質問は答えたくない、もしくは答えることができないものであったと考えられる。

質問には答えなかったものの、Lは「(職員の変更は)毎年あった」と話した。毎年ケア職員が変更になった事実はLのなかに残っているのである。その環境の中で、場や人に対して所属の感覚を持つことを諦めてしまったと考えられる。Lは、職員が変わるたびに「この人はこういうふうに思ってるから、この人にはこういう自分でいようみたいな」と、相手によって態度を変えていたことを話した。

K、L、Mは高齢児である。今までの経験と、X児童養護施設からの退所を意識する年齢であることが重なり、所属の感覚を何かしらに持つことを諦めているとも考えられる。一方で、X児童養護施設の中で、継続性を担保された経験があり、ケア職員とホームに対して所属の感覚を持っていた3名のうち2名も高齢児である。つまり、施設の中で高齢児になった子どもが所属の感覚を持つことをあきらめるのではなく、継続性が担保されるかどうか重要であるということである。

措置変更や、ケア職員の度重なる変更を経験することは、所属の感覚をどこかに持つことを諦める要因である。

6) 措置変更を経験した子ども

K、M以外に措置変更を経験した子どもはH、Iである。

Hは措置変更を2回経験しており、その2つの施設や家庭と交流がほとんどない。しかし、インタビューの中で、「(乳児院に)帰りたい気持ちはある。」「一番はお家に帰りたい」

と話した。“乳児院を覚えているか”尋ねると「写真ある!」と答えたが、覚えているかはあいまいであった。また、X 児童養護施設のことを全く語らず、措置変更前に生活していた Y 児童養護施設の話ばかりした。

H は、X 児童養護施設に入所してからも、ケア職員の度重なる変更を経験している。“ずっと同じホームで、ずっと同じ職員に担当してもらいたいか”という質問に「本当は。だけど、どっちとも、変えてもいいし、変えなくてもいいよ」と回答した。「本当は」と答えた部分が、乳児院や Y 児童養護施設から移動したくなかった H の気持ちと、出来ればこれからは変わらないで欲しいという気持ちが表出した発言であると考えられる。しかし、その思いがありながら、H は継続性を保障されていないのである。「変えてもいいし、変えなくてもいいよ」という言葉は、H が何かしらの所属の感覚を持つとしても、それが何度も変化してしまったことから、諦めのような感覚で出てきた言葉であるとも考えられる。

I は、X 児童養護施設のなかで、ケア職員の度重なる変更を経験した。その後、自分自身がホームを移動する経験もしている。また、X 児童養護施設から里親委託になったものの、数年後に委託解除になり、X 児童養護施設に再度入所した経緯がある。

インタビューの中で I は担当職員のことを「ずっと担当だから一番わかってる」と表現したが、I の担当職員との関係は、I がホームを移動してから 2 年である。2 年間担当が変わらなかつたことを、「ずっと担当」と表現しており、I が今までの生活の中で、そのような感情を持つ機会が乏しかったことからの発言であると考えられる。

「ずっと担当だから一番わかってる」と発言したものの、“この人のために頑張ろうと思える大人”の質問に対しては、「うーん、いないかなあ」と答えた。自分のことを「一

番わかってる」と思える大人がいるにもかかわらず、その直後の“この人のために頑張ろうと思える大人”という質問の答えにその大人が拳がらないのは、I が継続性を担保されない経験から、人に対する所属の感覚を持っていないことが表れた場面である。

H、I の 2 人の所属の感覚に関する発言は、あいまいさを感じる部分があった。変化に適応しながら、何かしらの所属の感覚を持つとしているために、あいまいな言葉や矛盾した言葉が子どもから出てきていると考えられる。

これらのことから、措置変更は、所属の感覚を強く持つことが難しくなる要因であったり、そもそも所属の感覚をどこかに持つことをあきらめるような要因であると考えられる。

IV. 考察

1. 施設におけるパーマネンシー保障

子どもへのインタビューの結果から、施設におけるパーマネンシー保障において、促進する肯定的要素と、対立する否定的要素があることがわかった(図 1)。

1) 肯定的要素

(1) ケアの継続性

ケアの継続性がなされた子どもは、ケア職員への肯定感と、場への肯定的な所属感を話した。また、その発言は職員と繋がりを感じているからこそその素直な感情表出であった。

パーマネンシーを、「継続性」と「所属の感覚」の 2 つの側面で成立する概念(Kirton、2009)と考えた場合、つまりケアの継続性がなされた子どもは、その 2 つの側面を肯定的な形で手にしている。これは、施設の中でのパーマネンシー保障が限りなく定義に近い形で行われた例であると考えられることができる。

(2) 施設での被養育経験

ケアの継続性がなされなかった子どもであっても、多くの子どもが場への所属の感覚について話した。

それは、X 児童養護施設での生活自体が、子どもが今までの経験で得ることのできなかった安定感のある生活であるからだと考えられる。そして、子どもにはそこに居場所を見つける力があるからである。

2) 否定的要素

(1) 措置変更の経験

措置変更の経験がある高齢児は、X 児童養護施設においてケアの継続性がなされたかにかかわらず、人や場に対して所属の感覚を話すことがなかった。

これは、措置変更の経験が子どもの中に大きく残り、所属の感覚をどこかに持つことを子どもが諦めてしまうからだと考えられる。

また、措置変更の経験があるものの、場に対する所属の感覚を話した子どもがいたが、あいまいな表現での回答であった。所属の感

覚を何かしらに持つことは諦めていないが、変化する場に適応するために、矛盾した気持ちを抱えているからだと考えられる。

(2) ケア職員の度重なる変更

X 児童養護施設において、ケア職員の度重なる変更を経験していた子どもは、所属の感覚についての発言が少ないか、なかった。所属の感覚については、ほとんどの子どもが場に対しての発言であった。また、元ケア職員へ肯定感のある発言をした子どもも、その理由を長い間担当したことと話し、継続性を担保されていない子どもならではの感覚であった。また、人に対しても場に対しても所属の感覚を話すことがなかった子どもは、高齢児であった。

これは、ケア職員の度重なる変更により、子どもがケア職員に対する肯定感を持つに至らないためであると考えられる。また、その中で年齢を重ねる過程で、場に対しても所属の感覚を持つことを諦めてしまうからだと考えられる。

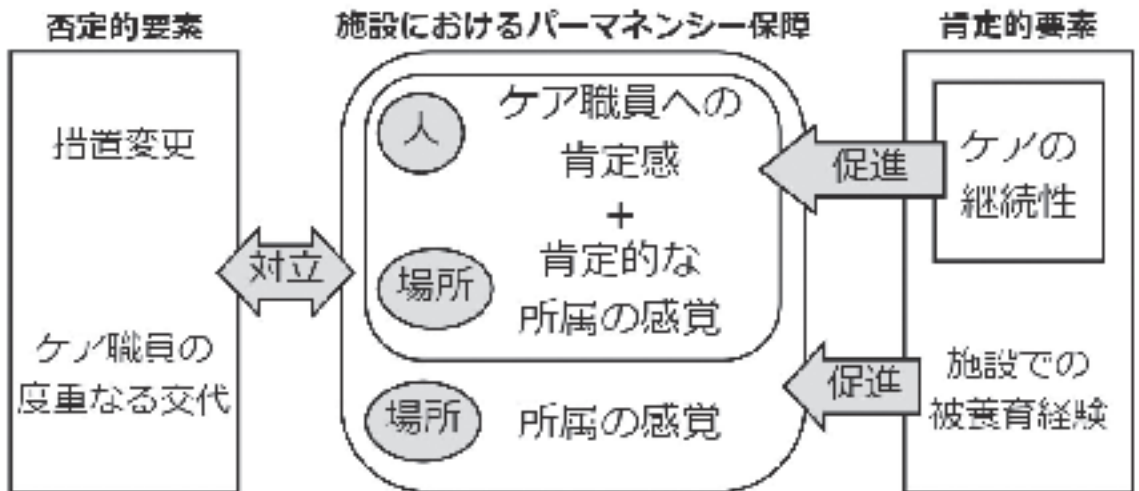


図1 施設におけるパーマネンシー保障

2. 子どもが施設の中でパーマネンシーの感覚を得るために必要なこと

施設での被養育経験は、子どもが居場所を得る経験である。それをもとに、子どもが場に対する所属の感覚を持つ。また、ケアの継続性が担保されれば、子どもがより肯定感の高い人と場への所属の感覚を持つことがわかった。

しかし、現状の社会的養護の場において、措置変更やケア職員の度重なる変更は行われている。そのたびに、インタビューを受けた子どもの多くがそうであったように、子どもは適応している。適応しなければ生きていけないからである。その力に、大人は頼りすぎているのではないだろうか。その結果、肯定的に居場所を得るはずの施設での被養育経験の中で、所属の感覚をどこかに持つことを諦めてしまう子どもがいるのである。

施設は、子どもたちが育つ場であり、育ちなおす場である。子どもが安心感を持ち、自分らしく育つために、大人側が施設の養育の根本的な改善により一層力を入れるべきである。子どもが適応するのは、家庭から施設に入所する、その一度で十分ではないだろうか。

子どもが適応する力に頼り続けなくて良いように、大人が継続性について努力すべきことは、短期的には意識を変えていくことであると考えられる。施設での生活の中であっても、継続性を意識した関わりが子どもにとって重要であり、パーマネンシーの感覚を持つことに繋がると全職員が共通認識を持つことである。また、中長期的には、乳児院を含むすべての措置変更をなくすこと、施設の中で子どもの移動や職員の異動をなくすこと、職員が働き続けられるような仕組みを作ることへの努力が必要であると考えられる。

施設で生活する子どもが1人でもいる以上、家庭養育の推進と並行して、施設がより良い場所になっていくことが必要である。つまり、今まさに、施設は継続性の担保を行えるように努力するべきである。その結果、子どもが所属

の感覚を持つ力がより良い力で発揮されれば、施設におけるパーマネンシーが多くの子どもに保障されることにつながるのである。

V. 結論

「パーマネンシー」という言葉を直訳すると「永続性」である。子どもの長い人生を考えれば、「永続性」とは家庭復帰や特別養子縁組、里親委託であるという考えは妥当であるともいえるであろう。しかし、家庭でも里親家庭でも生活することが難しい子どもはいなくならないのではないだろうか。そうだとすれば、施設で生活する子どもにも当然の権利としてあるはずのパーマネンシーは何らかの形で保障しようと努められるべきである。

本研究では、X 児童養護施設の子どもへのインタビューを通し、施設で生活している子どもの所属の感覚について分析を行った。その結果、ほとんどの子どもが場への所属の感覚を有していた。つまり、X 児童養護施設での被養育経験が、子どもが居場所を得る経験であり、場に対する所属の感覚を持つ促進要素であると考えられた。また、子ども自身が自分の力で何かしらに所属の感覚を持つ力を持っていることが分かった。さらに、継続性を担保された経験のある子どもは、ケア職員とホームに対し、肯定的な所属の感覚を持っており、職員と繋がりを感じているからこその感情表出があった。また、措置変更やケア職員の度重なる変更を経験した高齢児は、所属の感覚を感じる発言をしなかった。

これは、子どもが「人」と「場所」に対する信頼感を得るために、ケアの継続性が重要であるという結果である。

継続性を担保するために、短期的には施設での生活の中であっても、継続性を意識した関わりが子どもにとって重要であり、パーマネンシーの感覚を持つことに繋がると全職員が共通認識を持つことが必要であると考えられる。また、中長期的には、子どもの居場所を施設の中で移動しないこと、乳児院からの措置変更を含む、すべての措置変更を

しないで済むような仕組みづくりをすること、職員を施設の中で異動させないこと、職員の労働環境を見直し、退職者が減る仕組みづくりをすることが必要であると考え。

また、施設内で不適切なかかわりを受けた子どもが、その後継続性の担保がなされたにもかかわらず、大人に対する肯定的な発言をしていないことから、ケア職員やホームの質が高いことは施設の中でのパーマネンシー保障を考えるにあたっての大前提である。

Ⅶ. 本研究の限界

本研究の限界は、調査対象者が X 児童養護施設の子どものみであるということである。ほかの児童養護施設やその他の施設に必ずしも当てはまるとは考えられない。また、調査対象者が 13 名と限られているため、社会的養護の子どもや児童

養護施設で生活している子どもの全体像を表すことは難しい。

一方で、調査対象者は措置変更や里親委託解除、子どものホームの移動、職員の退職・異動等、現状の社会的養護の元で、多くの子どもたちが経験する可能性のある傷つき体験をしており、そのような経験をしている子どもたちの生の声を分析できたことは、貴重なデータであると考え。社会的養護の元、特に、施設で生活する子どもの権利が適切に保障される可能性につながっていくように、さらに多くの子どもたちの声を収集することが今後の課題と言える。

Ⅷ. 謝辞

本研究のインタビュー調査において、貴重なお話をしてくださった調査協力者の皆様に、心より感謝するとともに、深く敬意を表します。

<文献>

- ・伊藤嘉余子 (2017) 「社会的養護の子どもと措置変更 養育の質とパーマネンシー保障から考える」 明石書店
- ・Kirton,Derek(2009)「Child Social Work Policy&Practice.」 SAGE Publications.
- ・厚生労働省・新たな社会的養育の在り方に関する検討会(2017)「新しい社会的養育ビジョン」 <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000173888.pdf> (2021年7月21日取得)
- ・厚生労働省 (2017) 「社会的養護の現状について」 <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000187952.pdf> (2021年7月21日取得)
- ・Thoburn,June(1998)Child placement:principles and practice(= 1998, 平田 美智子, 鈴木 真理子訳, 「児童福祉のパーマネンシー ケースマネジメントの理念と実践」 筒井書房.)
- ・園井ゆり (2013) 「里親制度の家族社会学—養育家庭の可能性—」 ミネルヴァ書房